C'n scene news

VOL. 106

千葉市美術館ニュース 「C'n」(シーン) 106号

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

ccma_jp ccma_jp

［編集・発行］千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan https://www.ccma-net.jp/
［発行日］2022年12月20日
［印刷］株式会社 エイチケイ グラフィックス

亜欧堂田善《大日本金龍山之図》文化年間(1804-18)頃 須賀川市立博物館蔵

館長のつれづれコレクション案内　日本の銅版画ことはじめ　司馬江漢の西洋庭園図

司馬江漢《Serhentine》 紙本銅版筆彩 天明5(1785)年 25.6×37.0cm 千葉市美術館蔵

浮世絵の祖とされる菱川師宣が房総出身であったことから、当館は浮世絵や江戸絵画を収集の柱のひとつにしています。このたびご紹介する司馬江漢は、江戸絵画に西洋的な画法をもたらした人として知られています。江戸幕府は海外への窓口を非常に限定していましたが、その中でもオランダや中国、朝鮮半島との交流を通じて西洋の文物がもたらされ、人々に異郷への憧れを抱かせました。

司馬江漢(1747-1818)による「Serhentine」は、晴れた空のもと、高い木立に囲まれた水辺に憩う人々を描いた銅版画です。モノクロで刷り上がった版画に手彩色が施されています。画面内に大きく空が広がり、線遠近法によって空間の奥行きも表現され、淡い色彩もあいまって開放感があります。原画は『眼鏡絵十六点:バックス郡ストウの豪華なる邸館と庭園の平面プラン付』(ロンドン、1753年頃)の挿図「サーペンタイン河と人工洞窟」であるとされています。舞台となっているストウ・ガーデン(Stowe garden)はイギリス、バッキンガムシャーにある庭園。大部分がテンプル(Temple)家によって18世紀に造られ、イギリス風景庭園の典型例として18世紀後半には有名になっており、名所案内などの挿絵にも描かれました。庭園の大部分は1989年にナショナル・トラストの所有となって公開されており、今でも訪れることができます。江漢は原画をそのまま銅板に写したため、この作品は原画と左右反転の関係にあります。彩色のない状態では比較的簡素な表現ですが、異郷への憧れと、新しい技法への高揚感が伝わります。

江漢は鈴木春信の画風をまねて春重という名で浮世絵師として活躍しましたが、著書『春波楼筆記』に記したように、西洋絵画が「見ざる物を直に見る」ように描いていることを高く評価し、「蘭画と云ふは、吾日本唐画の如く、筆法、筆意、筆勢と云ふ事なし、只其物を真に写し、山水は其地を踏むが如くする法」ととらえて、陰影法、遠近法などを学びました。油彩や銅版画の技術も学び、日本で初めての銅版画の制作に1783(天明3)年に成功したとされています。

銅版画の始祖江漢の名は知られていたらしく、古今の文物に詳しかった松平定信(1758-1829)が1797(寛政9)年の序のある『退閑雑記』に「銅板鏤刻、蛮製にあれど、我国にてなすものなし、司馬江漢といふものはじめて製すれども細密ならず、ことにいといたう秘してわれのみなすてふ事をおふなり」と記しています。江漢の銅版画が緻密さを欠く上、その技術を普及しようとしなかった点が不満だった定信は、永田善吉に銅版画を学ばせ、西洋の銅版画に匹敵する技術を身につけさせて亜欧堂田善を名乗らせることとなりました。

印象派の画家たちが日本の浮世絵に多くを学んで新たな画風を創り出したように、視覚芸術における国際交流の中で、版画は大きな役割を果たしてきました。中国で7世紀ころに始まった木版技術は、日本に8世紀ころに伝わったとされ、江戸時代には超絶技巧と言えるほど高度な彫り、摺りの技術が発達しました。一方、西洋では中世には木版画が制作されたものの、15世紀にグーテンベルクが印刷術を発明してから銅版が主流になりました。西洋近代的な美術においてはオリジナリティが重視され、複数制作が一般的である版画の評価はいま一つの感はありますが、優れたイメージを多くの人々が楽しみ、共有できる版画の魅力に触れていただきたいと思います。

［館長　山梨絵美子］

没後
200年

亜欧堂田善

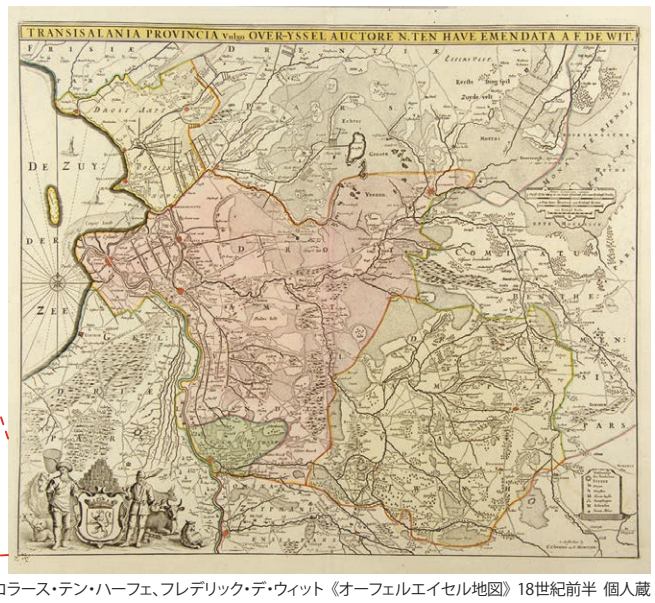
江戸の洋風画家・創造の軌跡

担当学芸員インタビュー

千葉市美術館でははじめてとなる洋風画の展覧会。日本画や浮世絵が盛んに制作されていた江戸時代後期、作家が手がけたのは西洋の技術を使った銅版画や油彩画でした。亜欧堂田善とはどのような人物なのか、どのような作品を手がけたのか、担当学芸員に聞きました。

【図1】 亜欧堂田善 《MASR》寛政年間（1789-1801）後期～享和年間（1801-04）頃 須賀川市立博物館蔵（太田貞喜コレクション）

（右図部分）



【図2】 ニコラース・テン・ハーフェ、フレデリック・デ・ウィット《オーフェルエイセル地図》18世紀前半 個人蔵

――はじめに、亜欧堂田善とはどのような画家なのでしょうか。

亜欧堂田善（あおうどうでんぜん）（1748-1822）は、江戸時代後期に活躍した洋風画家です。47歳までは地元・須賀川（福島）で家業を手伝っていました。本格的な画業のはじまりは、寛政の改革で知られる白河藩主・松平定信に見出され、銅版画の習得を命じられたことでした。

――直々に声がかかり、47歳から画家に……。現代ではまだまだ現役ですが、当時だとなかなかの高齢ですよね。

そうですね。定信は、おそらく銅版画の技術を医学書や地図などの実用的な目的に使いたいと考えており、技術を習得できる人材を探していました。そこで、声がかかったのが田善でした。領内を見回っていた定信が、たまたま田善が描いた屏風に目をとめたことがきっかけとも言われています。

――屏風を見て銅版画を頼むとは、すごいですね。もともと絵は描いていたのですか。

はい、描いていました。田善の家系は伊勢にルーツがあり、伊勢神宮に参詣する機会もあったようです。30代の頃には伊勢に赴き、同地の月僊（げっせん）という画僧のもとで絵を習っていたことがあります。また、定信に声をかけられてからは、同じく白河藩に仕えていた絵師・谷文晁（たにぶんちょう）にも絵を習っています。

――そのような画家の回顧展を、なぜ千葉市美術館で行うことになったのでしょうか。

きっかけは福島県立美術館からのお声がけでした。当館ではこれまで、江戸絵画のなかでもマイナーなテーマも扱ってきたことがあり、お誘いいただいたのだと思います。前回担当した「百花繚乱列島」展でも扱い、大変興味のある画家だったので、共同で開催することになりました。千葉市美術館でははじめての洋風画の展覧会です。

――銅版画の習得を命じられた田善は、はじめはどのような作品を手がけたのですか。

初期は、舶載された地図に描かれている挿絵や装飾を抜き出して、真似て描いていたようです【図1,2】。既存の図像を使って、練習を重ねていたのでしょう。制作年の記載がないので仮説ではありますが、作品の小ささや線の稚拙さから、初期作品だろうと推定しています。

――手本となる海外の資料が身の回りにあったのですね。

そうですね。鎖国下の日本で、オランダを経由して入ってきた海外の資料を参照していました。定信が実際に所持していたドイツの作家による馬の画帖と、それを写して描いた田善の銅版画も残っています。また、白河藩では蘭学者が抱えられていたので、銅版画に必要な薬剤の調合などは、彼らから学んだのだろうと思います。たくさんの人が力を貸してくれる恵まれた環境で、田善は銅版画に取り組み始めました。

――対照できる資料と作品がしっかり残っていることがすばらしいです。

田善は、現存する作品がとても多い作家です。明治9年に、明治天皇の東北巡幸をきっかけに須賀川にあった田善の作品（《水辺索馬之図》［宮内庁三の丸尚蔵館蔵］）が買い上げられました。それが契機となって早くから田善の評価が高まり、須賀川の各所蔵家にあった作品群が大切に守られてきた背景があります。今回の展示では、須賀川市立博物館のご協力によりそれらをほとんどご紹介できるので、展示室はパンパンです（笑）。

――その後、銅版画の技術を身につけてからは、どのような作品を手がけたのでしょうか。

作品を見てみると、細かなハッチングなど表現の幅が広がったり、題材のバリエーションが増えたりしています。また、版も大きくなっています。51歳頃に江戸に召し出されたと考えられていますが、それ以降は江戸の風景も描いていました【図3】。下絵から彫り、刷りまで、基本的にはすべて田善が手がけています。

――銅版画のほかに、油彩の洋風画も並行して描いていますよね。

はい、描いています。たとえば、《浅間山図屏風》【図4】は、油彩で描かれた屏風の作品です。下絵が残っているのですが、下絵にはもっと賑やかに人物やモチーフが登場します。しかし、屏風では、あえて日本画寄りの平坦な表現を心がけているようです。

――当時は、もちろん日本画や浮世絵も盛んに制作されていましたが、このような洋風画は広く知られていたのでしょうか。

洋風画家の先駆・司馬江漢（しばこうかん）による日本の風景を描いた油彩画が、厳島神社や芝の愛宕神社に奉納されていたので、人の目に触れる機会はあったと思います。また、洋風画の表現を取り入れた浮世絵も残っています。けれど、本格的に流行していたかというと……作家の数は少ないですね。

――晩年は須賀川に戻って制作を行うのですね。

60代後半には須賀川へ帰郷したと考えられています。それからは、日本画をふたたび描いていたようです【図5】。田善の画業は非常に濃密です。期間としては30年足らず、主要な作品はそのうちの約10年間に集中しています。

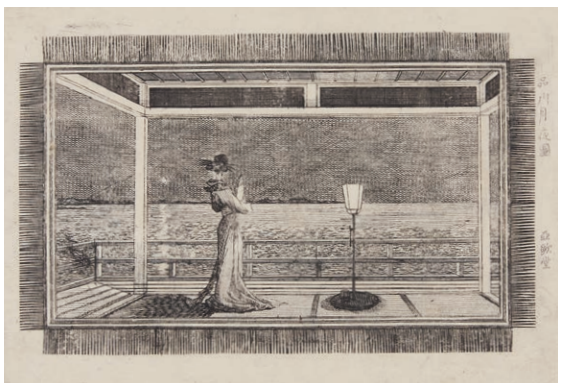
――最後に、展覧会の見どころをお聞かせください。

須賀川で育まれ、大切に守られてきた画家、そして作品を、千葉でご紹介できるのは大変貴重な機会です。また、調査を通して、田善の画業にはまだまだわからないところがたくさんあることを、改めて実感しました。展覧会では、作者に議論のある作品も含めて、できるだけ多くの作品をご紹介しています。亜欧堂田善とはどのような画家であったかを、ご覧になるみなさんと一緒に考えられるといいなと思っています。

［話し手：学芸員　松岡まり江］

没後200年 亜欧堂田善
江戸の洋風画家・創造の軌跡
会　期　2023年1月13日[金]～2月26日[日]
会　場　8・7階 企画展示室
休室日　1月30日[月]、2月6日[月]

詳細はホームページよりご覧ください



【図3】 亜欧堂田善 《品川月夜図》『銅版画東都名所図』のうち 文化元～6年（1804-09）頃 須賀川市立博物館蔵　※後期展示

【図4】 亜欧堂田善《浅間山図屏風》文化年間（1804-18）頃 重要文化財 東京国立博物館蔵 TNM Image Archives　※後期展示

【図5】 亜欧堂田善《七福神之図》（部分） 文化年間（1804-18）末期頃 須賀川市立博物館蔵

2022年10月13日（木）～12月25日（日）「つくりかけラボ09　大小島真木｜コレスポンダンス／ Correspondances」

レポート　人間以外の「ゲスト」によるトークイベント“万物は語る”

会期中に、パフォーマンス及び対談イベント「万物は語る」を開催しました。このイベントには、少し変わった共通のテーマが設定されています。それは、「人間ではない何かになって、人間に話しかけてもらう」というもの。毎回異なる「ゲスト」というフィルターを通して、人ではない存在がわたしたち人間に語りかけてくるのです。全6回のイベントのうち、第1回から第5回までの様子をレポートします。　［テキスト：嘱託学芸員　樽谷孝子］

つくりかけラボ09
大小島真木｜コレスポンダンス／Correspondances
会　期　2022年10月13日[木]-12月25日[日]
会　場　4階 子どもアトリエ
観覧料　無料

第1回 10月16日(日)
ゲスト:山／語り部:石倉敏明（人類学者・神話学者）

「ゲスト」である「山」から、山は、どこからが山で、どこからが山ではないのか。山には境界線が引けない、自分たちも本当は山の一部なのでは、という問いかけがありました。山や土、海と人間はつながっているものなのかもしれない。壮大なスケールで人間の存在を改めて考え直す時間になりました。その空間にいた参加者は、山という存在を強く意識するようになったと思います。

第2回 10月23日(日)
ゲスト:猿／語り部:足立薫（霊長類社会学者）

「ゲスト」はアフリカに住むダイアナモンキーという珍しい猿の一種。ダイアナモンキーは、混群と言われる異なった種類の猿と共に行動しています。「多様性?そんなの当たり前じゃん」。ダイアナモンキーはサラッと言います。そして、警戒心が高い猿も、食べずにはいられなくなるフルーツ「サコ」を取り巻く話も教えてくれました。猿が私たち人間に直接語りかけてくるので、空間の中に猿が飛び回っているような思いにもなりました。

第3回 10月29日(土)
ゲスト:粘菌／語り部:唐澤太輔（南方熊楠研究者）

粘菌は、テルミンの演奏と共に、スペースを不思議な雰囲気で包みながら語り始めます。粘菌という特殊な存在について、オノマトペを含みながら言葉が飛び交います。人間よりもはるか昔から存在している粘菌が、どのような動きをし、何を考えているのか。唐澤さんの言葉とパフォーマンスを通して理解し、そして同じ場にある大小島さんの作品世界もさらに深く理解できるような感覚もありました。

第4回　11月5日(土)
ゲスト:珊瑚／語り部:アゴスティーニ・シルバン（海洋生物学者）

「生まれたところでしか生きられない珊瑚。珊瑚は広がり、伸び、光をとることが生き方であり、骨格を200万年前からずっと、一年10センチほど、作り続けている」と珊瑚は語ります。「人間は珊瑚のことを一つ、とかたくさん、と呼ぶけれど、珊瑚にとってそれはどうでもいい。それは人間が勝手に考えていること」。環境と生物、人間。この関係性を改めて考え直す機会になりました。

第5回　11月13日(日)
ゲスト:糞／語り部:伊沢正名（糞土師）

頭にうんこの帽子を被り、うんこ棒を持って登場した「糞」。会場は満席、室外にも席を設けました。来場者から笑いを誘いながら、糞はこう語ります。「食は権利　うんこは責任　野糞は命の返し方」。うんこの話を聴きながら、人間達が口に入れるもの、体、人間が住む環境について、そして人間を取り巻く自然界について再度考え直す必要がある、というメッセージを受け止めました。

各回の詳細なレポートは大小島さんのホームページからお読みいただけます。

＼次回予告／

2023年1月14日～4月2日　「つくりかけラボ10　原倫太郎＋原游｜RE 幼年期ディスカバリー」

開幕間近！　アーティストインタビュー

［取材日：2022年11月30日］

第10弾となる「つくりかけラボ」は、インスタレーション作家の原倫太郎さんと、画家の原游さんによるアーティスト・ユニットをお招きします。プロジェクトのテーマは「子どもの頃の遊び」。どのような内容になるのでしょうか。おふたりにインタビューを行いました。

――どのようなプロジェクトになりそうですか。構想をお聞かせください。

倫太郎さん　プロジェクトには、「RE 幼年期ディスカバリー」とタイトルをつけました。どんな世代の人たちも、「幼年期」というものを体験しています。それを再発見するところから始まるプロジェクトです。全体的なイメージとしては、来場者の参加や制作によって、遊び空間が増殖していく。そして、それぞれがつながりあって「街」になっていくようなイメージです。

――なぜこのようなアイデアが生まれたのでしょうか。

倫太郎さん　これまでつくってきた作品もそうですが、観た映画や読んだ本、鑑賞したアート、そしてそれこそ「遊び」など、自分たちが経験してきたことがもとになって、今回のアイデアが生まれました。過去の経験とアートを結びつけることが、わたしたちの得意分野でもあるので、そのような背景からきています。

――「つくりかけラボ」は、来場者が展示にかかわることができるプロジェクトです。今回、来場者はどのようなことができるのでしょうか。

游さん　会場内で「秘密基地」を作ってもらったり、「遊び方研究所」の立ち上げに参加し新しい遊びを作ってもらったり……。来場者同士がつながりあうような遊びもつくれるといいですね。そういう体験をしてもらいたいと思っています。

――会期中、会場はどのように変化していきそうですか。

倫太郎さん　今回は、わたしたちだけで展示のすべてをつくるわけではありません。「街」というものは、そこにいる人たちがつくるものなので、予想できない方向に進んでいくのを楽しみたいと思っています。予想できないところがいいですね。そして、「街」ができてきたところで、会場内でパフォーマンスのようなイベントができたらいいなと考えています。

――最後に、来場者のみなさんへメッセージをお願いします。

倫太郎さん　アートは、かならずしもアーティストが主役でなくてもいいと思っています。とくに、わたしたちがメインフィールドとして活動している国際芸術祭では、協働でつくっていく側面が大きいです。ですので、今回も、千葉の子どもから大人のみなさんの力を借りながらプロジェクトをつくっていきたいと思っています。それが、わたしたちにとってもいい経験になりますので。いっしょにつくって再発見していきましょう！

つくりかけラボ10
原倫太郎+原游｜RE 幼年期ディスカバリー
会　期　2023年1月14日[土]～4月2日[日]
会　場　4階 子どもアトリエ
観覧料　無料

左：《妻有双六》2021年 かたくりの宿（新潟） Photo：Keizo Kioku
右：《アーケード卓球》2019年 丸亀町グリーン（香川）

＼浮世絵にまつわる展示やイベントが盛りだくさん！／

浮世絵ウィーク

2023年１月17日［火］-1月21日［土］ @さや堂ホール
10:00-18:00 ※20日［金］は20:00まで、21日［土］は17:00まで

千葉市美術館の最大のコレクションは、浮世絵版画です。江戸時代に発達した浮世絵は、版画であるがゆえの普及力や価格の安さから、庶民にいたるまで絵を楽しむことができるという世界でも稀な文化を形成しました。浮世絵版画は、プロデューサー的な役割の版元、絵師、それを板に彫る彫師、板に絵具をつけて摺る摺師の共同作業によって製作されます。特に明和２年（1765）頃に完成した「錦絵」は、多色摺木版画技法の最高峰とも言えるでしょう。色ごとに版を作り、「見当」と呼ばれる板木のマークに紙を合わせ、色がずれないように摺り重ねていくことによって色鮮やかな絵が仕上がるのです。

文化庁 Innovate Museum の助成により、浮世絵版画の技法を学ぶ5日間のイベントを、当館1階のさや堂ホールで開催することになりました。彫摺の道具類や絵具、摺の工程を示す順序摺、用いられた絵具等の展示に加え、下記のような実演、江戸時代からの伝統芸能なども予定しています。新年のひととき、浮世絵版画の技法を学びながら、江戸文化を楽しみましょう。

鳥文斎栄之《松葉屋新宅見世開 なか川 にをの いそち》
寛政７年（1795）頃 大英博物館蔵
©The Trustees of the British Museum

髪結の実演では、浮世絵に描かれた女性の髪型=横兵庫を再現します

アダチ伝統木版画技術保存財団による摺の実演の様子

子どもたちは飴ができる様子に釘付け
十辺舎一九著、軽雲亭国丸画『金草蛙』
江戸時代 19世紀

＼浮世絵ウィークイベントスケジュール／

※展示は会期中いつでもご覧になれます。

2023年

1月18日(水)	15:00	浮世絵の摺実演と解説（アダチ伝統木版画技術保存財団）
1月20日(金)	11:00	飴細工実演（飴細工師　花輪茶之介）
	14:00	髪結の実演と解説（解説:村田孝子　髪結:林照乃）
	17:30	英語による浮世絵の摺実演と解説（アダチ伝統木版画技術保存財団）
1月21日(土)	10:00	新春の獅子舞（登渡神社登戸神楽囃子連）
	11:00	浮世絵の摺実演と解説（アダチ伝統木版画技術保存財団）
	13:30	飴細工実演（飴細工師　花輪茶之介）

※詳細はホームページでご確認ください。

花輪茶之介さんによる飴細工

びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー　本をみる、美術をよむ vol.7

絵本作家による選書をご紹介！

「ブラチスラバ世界絵本原画展」の出品作家のうち、9名の作家に選書とコメントをいただく選書企画を行いました。テーマは「子どものころから学生のころに読み、いまも影響を受けていると感じる本」。今回は、そのなかから絵本や児童書、美術書の選書をご紹介します。

「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館４階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約 4,500 冊配架しています。
ぜひふらっと遊びにきてください！

© KARAPPO

選書の全貌は、ホームページでご覧いただけます！

うえだまことさんが選んだ本

ジョン・バーニンガム『ガンピーさんのふなあそび』

制作に行き詰まったとき、絵本を開いてみると、そこにあるのは「いつか見た親しみのある景色」。うえださんは、学生の頃に好きだった絵本に、いまも影響を受けているそうです。自身の作品とも響きあう水辺を舞台にした作品です。

きくちちきさんが選んだ本

フランク・アッシュ『どこへいったの、お月さま』

きくちさんは、ご自身のお子さんへ読み聞かせをするなかで、絵本に触れるようになったそうです。フランク・アッシュのクマくんシリーズは、どれもとてもかわいらしい。「絵や物語が可愛くて大好きです」と語ります。

しおたにまみこさんが選んだ本

いしいももこ作／なかがわそうや絵『ありこのおつかい』

しおたにさんが好きだった絵本として、ご自身のお母さんが教えてくれた本。しかし、しおたにさんは読んでもらった記憶がなかったそう。「なので、改めてよんでみたのですが、やはりすきでした」としおたにさんらしいコメントをいただきました。

中野真典さんが選んだ本

バルテュス『ミツ バルテュスによる四十枚の絵』

学生の頃、友人からもらったというこの一冊。バルテュスが描いた子猫「ミツ」のすがたがおさめられています。その後、中野さんも、飼い猫に「ミツ」と名づけました。ブラチスラバ世界絵本原画展の出品作『ミツ』は、ここからきているのですね。

降矢ななさんが選んだ本

ささきまき『やっぱりおおかみ』

仲間を探して街をさまようおおかみ。しかし、おおかみはどんな相手にも満足することができません。「思春期の私に『自分は自分』と教えてくれた一冊」と降矢さんは言います。降矢さん曰く、同じ作家の『ぼくがとぶ』もオススメとのこと。

ミロコマチコさんが選んだ本

ミヒャエル・エンデ『モモ』

ミロコマチコさんは、「今でも旅に行く時、持って行く本に迷ったら、これ」なのだそう。盗まれた時間を取り返すために立ち向かうモモは、「私の話をじっと聞き、児童書や絵本の世界へ誘ってくれました」と語ります。